

沖縄の酒と文学 ―酒神と祭り―

畠 山 篤

はじめに

二つの酒の飲み方 飲みたくなって自分の好き勝手に飲む酒がある。その時に応じて、ありとあらゆる思いを酒に託して飲む。きわめて個人的私的な飲み方で、ある意味ではわがままな酒である。これに対して、社会的公的な規制を受けて飲む酒がある。冠婚葬祭ということばで代表される場で飲む酒であり、各々に主題をもっている。ここでは、自分一人の思想・感情が主役になりえない、律義な飲み方が要請される。この様に、酒の飲み方は二つに大別できると思われる。

もっとも、この区分はいささか形態的すぎるかもしれない。機能的にみると、この二つの酒の飲み方も実は一連のものである。後者の威儀を正した場での酒のあと、後宴あるいは二次会と称してくだけた場で飲む酒があり、次第に場を変えて各個人が主役となる前者のあり方へと移行する。

そして、これは同時に歴史的発生的な順序をも示している。自分の欲求に応じて飲む酒のあり方は後世的なものであり、歴史を遡ってみると特権階級の酒の飲み方であった。酒は昔ほど晴の場の飲み物であり、時代が下るにつれて曇の飲み物・嗜好品となってきた。昔は個我を出すにも少しずつ制服を脱ぐことを求められたが、近代は初めから私服で飲むこともできるようになったのである。

酒と文学 酒の文学が誕生する背景・基盤を考える時、この二分法は効力をもつ。社会的な規制を受ける酒宴には、酒を飲む主旨・目的がある。もしそこに何らかの芸能・文学が生れるとすると、その主旨が主題となる。その場で発表される作品には、主催者（主人）と参会者（客人）の心が汲まれているなければならない。それだけに、一旦形式が整ったらみだりに独創を加えるべきものではなかったし、その型さえ踏襲していれば無難であった。そこでは文芸意識は希薄であり、類型が幅を利かしている。だから、おびただしいほどの類似の文学が出現するが、それはとりも直さずこの世を支える圧倒的大多数の常民の心の表現であった。この様な底辺の広い類型から典型が生れ、これを栄養源として高度な文学が生れる。

この点、何の制約も受けない自由な酒の飲み方は、一見個性的独創的な文学を生み出しそうにみえるが、実は想像するほどには秀作も凡作も少ないようである。秀作は凡作の上に生れるが、その凡作自体すら気ままな酒の場から生れなければならない必須条件を持たないのである。私的事情に根ざした酒の飲み方は、殊更に他者を意識しない独詠歌を生みはするだろうが、これは文学的な意欲に溢れる一部の人だけがよくすることである。集団の酒宴の場は参加

者に型通りの文学・芸能を求めるが、一人あるいは気心の知れた者同志ではその義務がないのである。

意外なことであるが、自由な酒の場からは独創的な文学は生れにくく、規制を受ける酒の場がより文学的な香りを漂わせているのである。もっとも常民が本当にいつでも酒を自由に飲めるようになったのも、こゝろ一世紀前後のことである。真に自己を見つめながら酒を飲んで個性的な文学を生み、読者もその心意気を理解するには、いまだ酒の量が足りないのかもしれない。

非文学性 いずれ大観してみるに、酒を主題とする文学は少ないようである。これも、酒を飲むことが神人交流あるいは人と人との交流を密にするための手段であって、陶醉そのものが目的でなかったからであろう。司祭者が神に神酒を勧め、神人や氏子がお下りを戴く。主人が客人に酒を勧め、客人はそれに謝す。目下の者・被支配者が目上の者・支配者に酒を勧める。酒の文学は、この様に社会的に機能する。酒呑みが酒の徳を讃えて様になるのには、それがよほどの傑作であるか、さもなければ老荘思想のような哲学にでも支えられたサロン（たとえば竹林の七賢、あるいは大伴旅人を中心とする筑紫歌壇など）がなければならない。このようなサロンの存在を許すほど社会が高度に発展し、複雑化しているところは稀である。従って、酒の文学に社会的に機能する非文学の要素（あるいは前文学性といってもよい）が強くなり、酒の文学として自立性をもつものが少なくなるのも当然のことである。

沖縄の場合 さて、沖縄の酒の文学の場合も基本的には以上の通りであろうが、その具体的な相となると容易には知り難い。ここでは村落における祭の宴に限定して、まず神酒の神について述べ、次いで宴の様式や特色を酒に関わる文学・芸能との関係で述べてみたい。歴史的文化的にみた時、沖縄の酒といえるのは、^{カミザケ}嚼酒と泡盛に尽きるであろう。沖縄の酒と文学を論じる時、この2種類の酒に問題は絞られなければならない。

1. 酒神マティヌシュラ加那志

古代日本の酒神 酒を飲む民族は、大体酒の神をもっている。エジプトのオシリスやギリシャのバックスは、その代表格である。古代日本においても、^{オオモノヌシノカミ}大物主神や^{スクナミカミ}少那御神（^{スクナビコナノ}少名毗古那神）などがある。両神とも国作りをした男神である。殊に少那御神の場合は「病を療むる方を定め」た神（神代紀上・第6の一書）とも伝えられ、^{クシ}酒（^{クシ}霊妙と同義）の^{カミ}司（仲哀記の歌謡）ともあって、いわば百薬の長としての性格が顕著に示されている。この神はまた「粟柄に縁りしかば、弾かれ渡りまして^{トコノクニ}常世郷に至りましき」（神代紀上・第6の一書）あるいは「^{スグアヒコノミコト}少日子命、粟を蒔きたまひしに、^{ミノ}莠実りて^{ホタ}離たりき。即ち、^{アハ}粟に載りて、^{トコノ}常世の国に弾かれ渡りましき」（^{トコノ}日本紀所収の^{アハ}伯耆国風土記逸文）とあるのをみると、穀神でもあった。酒が穀物から醸造されるのをみると、穀神が酒神になるのも当然である。そして、司祭役を男性が務めたので、自然と酒神が男神ということにもなる。

沖縄の酒神 この点、沖縄の場合はどうであろうか。神の島として首里王府からも崇敬された知念村久高島には、^{ガナシ}マティヌシュラ加那志がいる。久高島では各種の行事で歌われる神歌を

ティルルというが、このティルルの中によく次の一節が入る。

○マティヌシュラウヤサメーガ タポーチメール^(サ) タルマーミキ マティヌシュラ親主前が
賜わった樽真神酒

マティヌシュラ加那志は、マティヌシュラ親主前とも敬称され、神酒を村人に与える神である。島の伝承によると、マティヌシュラ^{ガナシ}加那志は、天道加那志^{テイントウーガナシ}（照ら神ともいい、太陽神で男神である）に次ぐ^{セゾ}霊力の高い神格で、月神でもあり、女神である。

真神酒 樽真神酒とは、神酒^{ミキ}に接頭語真^マを冠して讚美し、これを樽^{タル}に沢山醸したところからこのように名付けられたと思われる（タルをサルというのは、タ行がサ行と音相通だからである）。この樽真神酒をまた御酒^{ウンスク}ともいう。その製法は、粳米^{ウルチマイ}（祭りによって麦や粟を用いる。今は麦や粟を作らないので、大体米を用いる）を石臼で挽いて（昔は木臼でついていた）粉にし、これに水を入れてしとぎにする。次いで釜で煮てどろどろにし、別の容器に入れかえて乾かす。次いで、これに小麦粉を入れて発酵させるとともに味をつける。飲む時になって適当に湯を加えて液状にする。

これらの神酒の料を出すのは、村頭^{ムラガシラ}（年中行事などの準備などに携わり、エラブウナギ漁にも従事する。昔は2年任期であったが、今は1年になっている。村頭は2人おり、夫婦で業務に従っている）の儲けからの場合もあるが、ほとんどは地割制に基いて平等に割り当てられる。地割り全体は10組に分けられ、各組頭^{クミガシラ}が一地当りいくらかと穀物を集めて神酒にし、それを祭りの場^{ニワ}に出す場合もあれば、ソールイ神（竿下ろしの神の義で、漁の神）が各戸ごとに神酒を集めて祭の場^{ニワ}に出す時もある。これをティルルでは、

○テガバカイ マシバカイ 五合枥で計り 一升枥で計り
と表現する。

酒と女性 いずれ、農作物を中心とする祭りの料は、神酒の料をも含めて、島の女性達が耕作したものが中心である。ただし米だけは島ではできないので、島外から買い求めた米で神酒を作っている。男達が海に出ているので現金があり、米は容易に入手できている。自前でない作物で神酒を作るのはやゝ不自然であるが、五穀の発祥地としての誇りが作用しているようである。イザイホーのアリクヤーの綱引きの儀をみても、その綱の料となる藁は、稲が久高島から渡って初めて植えられたと伝える受水走水の御穂田^{ウキンヂユハインヂユミラダ}にちなんで、百名に求めることになっている。

そして、この神酒を醸造するのきまって女性であり、祭祀組織も女性が中心になっている。だから、酒の神が女性と観想されるのは、当然の成り行きであろう。

月神 この酒神が月神であるというのも、島の伝承を聞くと納得が行く。島の伝えによると、太陽神^{テイーラガミ}は男神であり（後述するように、8月に島の男達によってこの神が祭られている）、月神は女神である。太陽も月も元は共に照っていたが、月の方がより光り輝いていたので、太陽は男より女が輝くのを嫌って泥をかけた。そこで、月は太陽と別れて夜静かに照るようになったという。また、女性は人に顔を見られるのを恥しく思うので、月は夜出歩くのだともいう。

あるいはまた、男女が相会う時も恥しいので、その時はもっと暗くなるという月食の由来譚もある。

しかし、右の伝承は、月神が直ちに酒神であることを示してはいない。そこで、女神ということが中核にあって、この女神に島の女性（すなわち神女）が重ねられて発想されていると考えるべきかもしれない。神女達は穀物を作って酒を醸し、そして男性が太陽なら女性は月であると観想している。ここに、女性ということを橋渡しとして酒神と月神が結合したと考えるのである。

あるいは、マティヌシュラの名義が、月神と酒神の直接的な関係を知る手懸りになるのかもしれない。この神名の名義は今となっては島の古老にも明確な説明ができなくなっているが、一応の仮説が立てられない訳でもない。マティヌシュラの語構成は、マティ+格助詞ヌ+シュラであろう。8月のビンヌシュンヌのティルルなどをみると、清らさ（美しさ）をシュラサと言っているので、神名のシュラは清らであると思われる。すると、問題はマティであるが、島では祭りをマティあるいはマッティと言っているのです、この祭りかもしれない。すなわち、この神名は「祭りの清ら（美しさ）」（祭りの花）と考えられる。祭りには神酒が付き物なので、その神酒を下さる月神を讃えて「祭りの清ら（美しさ）」と言うと考えるのである。

東大主 マティヌシュラ加那志を考える時、今一つ忘れられない神がいる。それは、ニライカナイの最高神^{（ライ）ウブメシ}ニレー大主に次ぐ女神・東大主である。この神を司る神人は、現在久高ノロが兼ねている。この神人が司祭者となって執行する行事が、4月と9月の神加那志^{アガリウブメシ}である。これはニライカナイから神々が群行し、神代の島建てを復演して島と島人の新生・再生を図る祭りである。この時の東大主の神衣裳は、満月を囲んで稲が描かれ、その下に裸妻と粟が図案化されていたという（この神衣裳は2次大戦で紛失し、今は白衣裳になっている）。このことは、月と穀物と女性との密接な関係を示し、同時にニライカナイにいる東大主の性格をも明らかにしている。

私たちは「おもろ草子」の影響もあって、東方^{アガルイ}といえばアケマモドロ（明けま^{マダラ}斑で、太陽が海から昇る瞬間の光線の美しさを讃えている）ばかりを連想していたのかもしれない。月も東方から昇ってこの世を照している。そして、更に広く富と幸せの根源であるニライカナイが東方にあれば、ニライカナイの神が五穀をもたらすと伝えるのも当然である。

五穀の発祥 『中山志鑑』の「琉球開闢之事」の条をみると、アマミキョが天上から五穀の種をまず久高島にもたらし、それから琉球全土に広げたと伝える。そして、これをもって国王が2年に1度2月の麦の初穂祭の為に久高島に渡ったという。島の伝えでは、そのアマミキョの出自をニライカナイに求めている。このアマミキョと東大主の関係は明らかでない。しかし、4月と9月の神加那志^{カンジャナシー}をみると、東大主は各々の神々、たとえばアマミチャーに命令を下して、島作り・国作りをさせている。東大主はこれほど格の高い神であるから、ニライカナイで五穀を司るのをその職能の一つとしていたと考えられる。

以上の伝承は富を与える神の側に立ったものであるが、富を与えられる人間の側に立った伝

承もある。『琉球国由来記』巻一によると、久高島にアナゴノ^シ子・アナゴノ^フ姥夫婦がおり、ニライカナイに通じる東海岸の伊敷^{イシキハマ}浜で、五穀を中心とする植物の種子が入った白壺を拾っている。そして、時を得て生え始め、穀物を得るとともに御嶽も出来たという。そして、この御嶽^{キンマムシ}に君真物（ニライカナイからの来訪神）が出現したという。これこそ正に4月と9月の神加那^{カンジャナ}志に相当するものであろう。『遺老説伝』では、その主人公が白樽^{シラタル}・母加那志夫婦^{フアーガナシ}に変わっているだけで、ほぼ同趣旨の伝承を記している。

この五穀の入った白壺というニライカナイからの漂着物は、更に発展して黄金^{コガネ}の瓜子^{ウリザネ}として伊敷浜に寄着き、これを得た思金松兼が豊作をもたらす至宝という触れ込みで首里城に乗り込み、やがて西威王に即位するという伝えを生み出している。

この様に、酒神の性格を探って行くと、神酒の料となる五穀の由来と結びつき、ニライカナイとの密接な交渉のあることが分かる。マティヌシュラ加那志と東大主加那志とは、極めて近い位相にある。

月神と保食神 記紀神話をみるに、神代紀上の第11の一書に、月夜見尊（月神）が女神の^{ウケモチノカミ}保食神（食物の神）を殺して五穀を得たという伝承が残っている。ここでも月神と穀物と女性との密接な関係が窺われる。神代紀上に記す五穀の中心が畑作物であるのも、久高島の条件と一致している。短絡は禁物であるが、基層文化を迎えることで、両者が繋がるかもしれない。

2. 祭りの酒宴

さて、このような伝承をもつ神酒は、どのように用いられるであろうか。以下、その具体例を上げてみよう。

マッティ 麦と粟の祭りが2度ずつ計4回行われ、これをマッティと称している。司祭者は両ノロと根神であり、各作物の豊作を祈願し、収穫を感謝する。地割りで割り当てられた地から平等に穀物を出して神酒などを作り、これを神と神人が共食する。ウンサク（御酒の義で、タムトゥに次ぐ一般神女の階級）が、ニープトゥイ（柄杓取りの義で、男の神人）と村頭の注ぐ神酒をアシクモーなどの碗に受け、これを両ノロと根神並びにそれらの掟神そしてタムトゥ達（一般神女の最高の階級）に幾度となく捧げ続ける。そして、それからその他の神人にも捧げられる。

このマッティは準備期間を除いて2日間行われ、ほぼ同じことを6回も繰り返す。単純な反復であるだけに、神酒を供される高級神女達にはさんざめきも洩れる。しかし、黙々と神酒を捧げ続ける敬虔なウンサク達をみると、島の生活を支える主作物の占める役割りの大きさを痛感せずにはいられない。この祭りの重点は、とれた作物で作った神酒の共食にある。そして、神酒を注ぐことを職掌とするニープ取りが設けられ、神酒を捧げる役目に注目してウンサクという神女の階級名をつけているところにも、共同体における神酒の持つ重要性がよく示されている。まことに五穀発祥の地にふさわしい祭りである。

なお、祭りの場^{ニワ}から次の場^{ニワ}に移動する道中で、外間根人はマッティ旗^{ホカフニツチュ}（二次大戦で失ってい

る)を掲げながら、次のおもろを歌う。

○トゥユミ ワカノロ ディービンク カザティ シュニン ウギヤマビラ 響み若ノロが
(その名も知られている若々しいノロの意で、ここでは久高ノロを指す) 神酒を入れた銚子
子を 飾って みんなで 拝もう

これは一日目の^{ユ-}タマッティの時のおもろである。男の神人の最高位にある外間根人が、こうして神酒を引き合いに出して篤い信仰心を喚起するのも、神酒にそれなりの功德があるからである。

イザイホー マッティの場合は後宴にまで続かないが、12年に一度催される島最大の年中行事・イザイホーは、宴の様式を典型的に見せてくれる。この祭りは、島を守る祭祀組織の下部を支えるナンチュ(成人あるいは新人の義)を認定する、いわば成巫式である。俗人から神女に生れ変わるためには、容易ならざる試練を受けなければならない。そして、その長い厳しい物忌みに耐えて晴れて姉妹神・神女になったことを認定された後、神酒を入れた桶の周りをティルルを唱えながらゆるやかにそして華やかに舞う。この儀を桶回り^{ウナリガミ}という。ティルルの内容は、前述したように酒神を讃え、昔ながらの神遊びであることを述べ、島の繁栄を祈願するものである。この神酒の料はナンチュの家から出され、これを神と神人に捧げるのも、今認定されたばかりのナンチュの初仕事である。これも、いわば祭場に臨んだ神と神人の共食の儀礼である。

次いで、そのまゝ宴に入る。厳粛にして重々しい神事は全て無事に終り、数ヶ月前から続いた緊張感はたちまち解けて、祭りの場は歓喜一色に塗りこめられる。泡盛が誰かれとなく振る舞われ、三線^{サンシン}に乗せて歌と踊りが繰り広げられる。しかし、解放にも秩序があり、まずかぎりで風が舞われてめでたさが謳歌され、次いで両ノロ、掟神という風に神格に従ってカチャーシーが踊られる。そして、神人のあと島の男達や神役を退いた老女達や子供達も踊る。島外の者の飛び入りが登場する頃には、大方の者は微醺を帯び、誰もが疑いもなく一心同体であるという気分になっている。

しかし、後宴は今一度催される。次の日の午前中は神事の敷設物を取り払い、午後は翌日のウプトッキ(御願解き)の時の料理の具を求める。下級の神女は^{ニガナバー}苦菜葉を摘み、男達は漁に出て魚をとる。翌日の御願解きは神事なので神酒が出、^{ニガナバー}苦菜葉と刺身のあえ物などが出され、神神に感謝の祈りがなされる。そして、夕方から島中のものが両ノロ^{ドウンチ}殿内に集まり、ウプクイが催される。あえ物を肴に泡盛が出され、三線^{サンシン}と太鼓に合せて歌い踊る。御願解きも終り、イザイホーの真の成就をここにかみしめるのである。宴の飲びは潮騒にもまさってどよめく。

後宴が2回あるが、これもイザイホーという神事の重さを示すであろう。重要な祭りにおいては度重なる丁寧な祈願がなされ、それに呼応して感謝もまた繰り返されなければならない。こうして、共通の目的に向って精進し、成就されたあかつきに共にする飲食は、同胞意識を更に強固にしているのである。

宴の様式 さて、このイザイホーの流れをみると、正儀においては神酒が飲まれ、時にはティルルが歌われて神遊びがなされる。これに対して、後宴に入るや座はくだけ、泡盛が振る舞われ、三線^{サンシン}に合わせた歌舞音曲が楽しめる。そして、参会者はとめどなく酔い痴れる。

ここに宴の様式が明らかにみてとれる。ここには、聖から俗へ、これを時間的にみると神代の原初の次元（幻視の世界）から現代（現実の世界）へ、酒に目を向けると神酒から泡盛へ、文学・芸能に注目するとティール・神遊びから三線^{サンシン}にのせる琉歌や他島の民謡そしてカチャーシーへという転換があるのである。

九月の神加那志 宴には接待する主人と接待される客人とがある。神事においては、基本的には神人が主人であり、神が客人である。今までの二例はこの点明確でなかった。これも神を祭る者が実は神でもあったからである。沖縄の場合神と神を祭る者との関係が極めて変幻自在で、神歌を調べてみても神の発することばと神人の神へのことばが混在している。

この点、主人と客人がはっきりと目に見える適例として、9月の神加那志^{カンヂャナシー ハサキ}の炊きの宴が上げられる。久高島の特産品であるエラブウナギの漁獲権は、東大主と外間根人、外間ノロにあり、各々漁場も決っている。この中でも東大主の持ち分には雌が多く、殊に豊漁である。エラブ漁は6月24日から12月晦日までですが、その最盛期は9月頃までである。東大主の場合、2組の村頭夫婦を手伝わせるので、儲けは3等分している。4月の神加那志において国神（両根人・両ノロ・根神・掟神の8名）を中心に神人がエラブウナギの豊漁を祈願しているので、9月のこの行事でその感謝として東大主と村頭夫婦が祭りの料を出し、国神を招いて宴を催す。

当日3度も国神に案内がなされ、その中の1度はタルマウユー（お粥であるが、一種の神酒である）が捧げられる。祭り・宴の場である御殿庭に参集した国神には、まず茶や前菜が出される。主人側の東大主はエラブウナギを燻製にする^{ウドゥンミヤ}煤乾屋^{バイカンヤ}に入り、九合花とウユー2碗を供えて、エラブ漁の豊漁を感謝し、村頭達の繁栄を祈る。そして、お下りとして一つのウユーが外間ノロに手渡され、次々と順位に従って国神が回し飲みをする。次いでビザイサンニとエラブウナギなどを盛りつけた正式の料理が配膳される。頃合いをみて、年上の村頭が各神人に泡盛を勧め、その度に返盃される。年上の村頭は今年限りで務めを終えるので、今まで加護してくれた国神への感謝をこめた勧酒であり、国神の返盃は村頭としてよく務めたことへの慰労と勧酒に対する謝酒である。宴の後、二度御盆^{ニドゥウブン}と称して、いわゆる二の膳を更に国神の自宅に送り届ける。

この宴の過程を整理すると、まず東大主を務める神女が祝詞を上げる神事・正儀があり、次いで宴の座に入って神酒が回され料理が出る。そして泡盛の献盃・返盃が行われる。ここにも正儀から直会へ、神酒から泡盛へというプロセスが窺われ、同時に主人と客人の関係も明瞭に窺われる。

ティーラーガミ 久高島には、神酒を神と人とが共食する時の勧酒歌がある。それは、8月のティーラー神（太陽神の祭り）で歌われ、ティーラーガミのティールといわれている。

- 1 ハティガティヌ ハジマイ 8月行事の始まりとして^{カシキ}飯きを作り ヘイ ティーラー
ガームスルティ マブル ヘイ（14まで繰り返されるので、以下省略する）
- 2 ハティガティヌ スバサン 8月の柴挿しをして 厄を払い
- 3 アムトゥカラ アサンハリ 元家と両ノロ殿内から 一般の家々から

- 4 タティマンヌ ワカグラ ソールイの神（漁を司る神人）が
- 5 シマハニティ イモーリヨー 島を抱くように廻り
- 6 クニハニティ イモーリヨー 国を抱くように廻り
- 7 テガバカイ ミソーリーヨー 五合枡で計って集めた真神酒^{マーミキ}を召し上れ
- 8 マシバカイ ミソーリーヨー 一升枡で計って集めた真神酒^{マーミキ}を召し上れ
- 9 ウフハマ ムチウルティ この神酒を大浜に持って下り
- 10 ナガハマニ ムチウルティ この神酒を長浜に持って下り
- 11 サウルカラ クダユル 中国から手に入れた
- 12 アカワンヌ ユナウシ 赤椀に盛りつけた世直しの酒だ
- 13 ヤマトウカラ クダユル 日本から手に入れた
- 14 クロワンヌ ユナウシ 黒椀に盛りつけた世直しの酒だ
- 15 コーイナン サービタン コーイナウ ウサギティ ウガマー コーイナウ ウリ コーイナン サービタン コーイナウ ササギティ ウガマー コーイナウ 供物を 捧げました 供物を捧げて拝みましょう 供物を それ 供物をば 捧げました 供物を 捧げて 拝みましょう 供物をば

この祭りは男の祭りで、男の神人が中心となり（その筆頭は外間根人である）、大主^{ウブシュ}（50才から70才までの島の男性）が参加する。夕方、ハンチャタイ（神の土地の意で、三角地になっている）で東方を拝する。このハンチャタイには天の門^{テンヌジョー}という石壇が設けられており、天界との交流地点となっている。この月の十五夜祭りを催している時、この天の門^{テンヌジョー}の上に糸に吊るされた蓋^{チンター}が下りてくると伝えているから、日神と月神の因縁は深く、冷傘^{リヤンサン}の考え方もいまだに記憶されていることが分かる。このハンチャタイでの神事は、太陽神の招請である。

次いで、西方のチミン^{トウマイ}泊の大浜（長浜とも）に祭場を変えて、神と人の共食が行われる。ティルルにもある様に、8月の行事は飯^{カシチー}き・柴挿^{マカナ}しと続き、それからソールイ^{マーミキ}賄いと称してソールイ神（漁の神人）が元家と各家庭を廻って真神酒を集める。この神酒は大浜の2ヶ所に据えられ、村頭が椀（ティルルに言うところの赤椀・黒椀に相当する）に注いだ神酒を、ウナグナー（16才の少年のことで、この年令から1人前扱いされる）が給仕する。そして、肴として刺身をわしづかみにしながら別のウナグナーが給仕する。この刺身は、この日の午前中に16才から50才までの海人^{ウミンチュ}がアンデキャー（追い込み漁）でとった魚を、自分達で調理したものである。刺身といっても、醤油もわさびもつけない、魚そのものである。しかし、その新鮮さと海水中の塩味によって醸し出される味は絶妙で、自然そのものの味が舌にこたえる。田畑の幸から作られた真神酒^{マーミキ}とこの野性的な幾種類もの海の幸は、実に美事な取り合せで、参会者は神酒と刺身のお代わりをする。

次いで、祭場を更に御殿庭^{ウドウンミヤ}に移すが、その道行きに、男の神人と大主組^{ウブシュ}が、太陽を描いた扇子を左右に振る所作をしながら、上のティルルを願う。ティルルの中心は、実は神人共食の場にこそふさわしい勧酒を主題としている。そこで、共食の場の勧酒歌が道中歌に組み込まれたようにも考えられるが、この道中の歌は祭場の移動に要する時間に丁度合うように仕組まれて

いるという。してみると、道中の歌としての性格は、主に供物を捧げたことを強調する15に示されているようである。このティルルの構成が8月行事の順を追っているところを見ると、道中の時点は15にあることがわかるのである。島の伝承では、15は太陽神が天上に帰る時の歌だという。極めて理に叶った説明で、どこにも破綻はない。御殿庭では神女達が待ちうけており、全員で東方を揺拝する。これは太陽神をお送りする儀式であると解される。

この後、男達は円陣を作って臼太鼓を踊り、カチャーシーを踊る。この段階はすでに後宴に入っているであろう。ひき続き大浜に戻り、先の共食の儀と同じ形で酒宴を催す。浜では神人も大主組も平服にもどり、島中の男性が参加するので、座が一層くだけていることがわかる。真神酒が椀で廻し飲みされ、刺身が配られる。そして、それから泡盛が供される。しばらくして、同じ砂浜で沖縄相撲が催される。子供から順に青年へと取り組みが進む頃には、真紅に揺らぐ大きな太陽神が斎場御嶽のかなたにゆったりと消え入ろうとしている。

一体に男の祭りは、神女の祭りに比較してそっけなく、祭りの意義を忘れがちである。これは、男のもつ照れと、旅によって体得した開明性によるのかもしれない。しかし、ティルルに祭りの主題が明確に示されている。このティルルは、男神の太陽神に世直しを祈念して、由緒ある椀にもった真神酒を神と参列者に勧め、充分に満足してもらったと述べている。こうして神を歓待し、喜んで帰ってもらうようにしむけたのである。

サウル なお、歌詞の中に注目したい言葉がある。それは中国のことをサ(タとも)ウルとっていることである。韓国の首都ソウルが神代紀(下)の天孫降臨の条のソホリの峯と同語で、中央という意味であることは自明のことであるが、これが中国にも用いられている。この(タ)サウルは別のティルル(例えば神加那志の)によるとサウルムルクともなっている。これには、久高の男性が唐船通いの船頭や舟子になることを義務づけられていた首里王府時代の印象が残っていると思われる。首里という地名自体ソウルと同語であろうという説がある位であるから、大国の中国をもサウルと別称したことも充分考えられてしかるべきことである。

大真神酒と真神酒小 年中行事における神酒をめぐる島の男女が交流を深める例の次に見てみたい。7月の大真神酒と10月の真神酒小は、ともに大漁祈願祭で、対になっている。祭りの名称自体が神酒に基いており、神酒の重要性がわかる。7月の神酒は、ソールイ^{マカナ}賄い(兄弟^{キマカナ}賄いとも)といって、ソールイ神の責任のもとに作られ、祭りに提供される。10月の神酒はウユー(お粥)であり、姉妹^{ユナイマカナ}賄いといって、神女の責任のもとに作られ、祭りの場に提供される。名称中の大は、神酒の中でも本格的な神酒であることを示すとともに、男を立てた美称であろう。これに対して、小は、簡便な作り方をする神酒であることを示すとともに、女の遠慮深さを示す愛称であろう。神女達は男達の健康と大漁を祈願し、漁の男神は神女達に礼を尽す。こうして、神事の中の宴における神酒の交換を通して、男女の交流がなされる。

おなり神 神女と男の神人は兄妹関係にはないが、兄弟^{ユキマカナ}賄い、姉妹^{ユナイマカナ}賄いという。これは一種の擬制で、兄弟の幸せを祈願するのがおなり神(姉妹神)であるという信仰に根ざしていると思われる。

イザイホーで神女が誕生し、おなり神となる。このおなり神誕生後に各戸廻りをし、新おなり神は兄弟との間に樽真ウユーを交換する。この神酒の勧め方は、おなり神を敬って兄弟が先に献盃する。この神酒の交換によって、おなり神と兄弟とが堅く結合されるのである。

5月に行われるタムトゥ祝い（タムトゥという一般の神女階級の最高位に就任する儀式）でも又、宴が催される。正式の神事が終わってから、樽真神酒も含む神饌のお下りを参列者一同が食べる。それから、巳年生れの男性が、タムトゥに就任する神女と樽真神酒を交換する。巳年生れの人は縁起がよいといわれているからである。次いで、新タムトゥの兄弟が、客人とおなり神に対して感謝の意を表して、ノロ・掟神・巳年生れの男、そして自分のおなり神に泡盛を勧め、返盃される。最後に、神女の息子が同様に酒を勧め、返盃される。

この宴の性格は、神事で歌われるウムイによく示されている。ウムイは、兄弟が姉妹神誕生のイザイホーの準備をしてくれ、このタムトゥ祝いでは息子が祭りの料を出して下さる、と述べている。すなわち、若い時のおなり神は兄弟間の深い関係に基くが、タムトゥになる60才になると更に母子関係をも含み持つようになるのである。兄弟関係にしろ母子関係にしろ、いづれ血筋に霊性を認め、この間でことある毎に盃のやりとりをしている。

このため、他人同志の結合した夫婦は、結婚式を除いて盃を交換する場を持たない。このことに関して、島には次の様なエピソードがある。昔、あるタムトゥ祝いで新タムトゥの夫が妻の祝いのためにといって特別魚をとって供したという。しかし、おもしろには妻の兄弟と息子しか登場しないし、盃の交換も自分ではできない。ただ祝いの座の一隅にいて、申し訳程度に出された料理と酒を前にし、寂びしさが次第に高じて腹を立て、揚句は下働きに来ていた女から酒を勧められたのをきっかけに座を蹴って飛び出したという。

夫婦愛に目覚めた者には、この様に兄妹中心の行事のあり方に不満を持つものもいたのである。これほどおなり神信仰が根強いので、盃の交換もいきおい兄妹の間で行われることが多かったのである。

文化の重層 久高島では、饗宴が興宴を通り越して狂宴（泥酔の宴）になることはない。島の男は16才になると唐船通いの船子になるか、漁に出るかして島におらず、女達が島を守って畑作に精を出す。このため、どうしても祭りは神女の敬虔な祈願が中心となり、娯楽的な要素が少なくなる。野遊びがないのも、島のこの男女の生活パターンによるのかもしれない。そこで、独特の神事芸能が驚くほど豊かであるのに反して、娯楽的な芸能はほとんど島外のものばかりである。それも男達が持ち込んだもので、旅先の奄美や八重山の歌の影響が著しい。これも、座のくだけた宴あるいは野遊びなどの遊樂的な場において美声を競い、気のきいた歌を歌ったりする機会がなかったからである。この島の文化を巨視的にみると、女性による神事を中心とした在来文化と、男性によって外部からもたらされた外来文化とが、重層している。そして、前者のあり方が重きをなしており、調和を好む神女の影響力もあって、宴も乱に及ぶことはないのである。久高島の酒神マティヌシュラ加那志は、パッカスのような酔いどれではない。そういえば、「糸満・久高」と恐れられる海人も、島にあっては岡に上った河童である。

これも生活の知恵で、伝統的な夫婦（あるいは男女）の住み分けなのである。久高島を神の島というのは、首里王府の崇敬した島ということを持ち出すまでもなく、島自体の論理によって神女の島なのである。

3. 宴の様式

豊年祭 次に、八重山の波照間島の豊年祭を取り上げ、宴のあり方と文学との関係を探ってみたい。この祭りにおける宴の様式は極めて整然としており、全て基本的には同一パターンの反復とみることができる。この祭りの典型的な宴は、神宴（波照間島で最も歴史の古い富嘉部落の女バナヌファーから選ばれた9名の神女で構成される。来訪神的性格が認められる）を接待する場に窺われる。神客は雨を司る神を招来する神人として島人から畏敬され、各部落の御嶽で大いに歓待される。

式次第 その式次第は大体次の通りである。

- A 御嶽の神を拜んだ後、祝いの座に入る。御嶽の司は神客に歓迎の挨拶をし、神客も来訪の趣旨を述べる。そして、まず神饌のお下りのマンゾーをつまみに、神酒を勧める。次いで、神饌のタチグシン（泡盛を入れた銚子である。グシンとは沖縄で五水と表記されるもので、葉と同義であろう。このグシンを入れた立ち姿から、タチグシンと名付けたのであろう）の酒を勧め、同じく肴として、タチブセ（細切りにした魚の干物で、極めて塩辛いものである）を数本配る。これを2度繰り返す。1度目は司の分、2度目は部落（御嶽）の分だという。この他、神菓子と茶と茶菓子を勧める。
- B 次いで、酒（泡盛）、天ぶら等を盛りつけた本膳が配られ、3名程の接待役が歓迎の挨拶をし、神客が謝辞を述べる。昔はこの後、取り交しの盃、取り持ちの盃と称して、2度泡盛を勧めたという。

次に、長命草を添えた御鱈を肴にして、神酒入りの角皿（木製のうるし塗りの酒器で、足が4本あり、左右に把手があって角のような形をしている）が配られ、〈角皿〉という歌が歌われる。歌い方は、接待役が1番を歌う毎に客が復唱するというものである。

〈角皿〉

- 1 キユガピヌ クガニピドゥ ニガヨル 今日の日の 黄金日をば 願う
- 2 カンクパナ ウイクパナ タボラリ 神饌花 上饌花を 賜わる
- 3 ナウリユヌ ミギリユドゥ ニガヨル 直り世の 稔り世をば 願う
- 4 ナウリユヌ ミギリユヌ ミボギニ 直り世の 稔り世の お蔭で
- 5 ニゴタムチ シヂタムチ タボラリ 願ったように 手擦りしたように 賜わり
- 6 シュヌザラン ミョーヌセスザラ ミョーヤウィス 角皿の 立派な角皿を 差し上げる
- 7 ナガムラシ パタユラシ タボラリ 中盛らし 端溢らして 賜わる

8 ウヌニガイ ウヌカフドゥ タボラリ この願い この果報を 賜わる

(囃子詞) ピヤーシヨー ピヤーシヨー ユワナウル ユースーナウル 囃せよ 囃せ

世は直る 世ぞ直る

それから客が次の様に謝辞を述べる。

○ シュヌザラ ミュームヤ ウミシャグ ウガミタユ 角皿の御神酒を戴いてありがとう
(ウガミタユは拝んだというのが本義であるが、ここでは感謝して拝むことである)

これを受けて接待役はこう唱える。

○ マースカージョー 真の風よ

次いで、神酒入りの中皿が配られ、次の中皿を歌う。歌う順序は、(一)を接待役が、(二)を客が、(三)を接待役が歌う。

ナカザラ
〈中皿〉

(一) 1 ニウスイヌ ウミシャグユ ムトゥシバドゥ ユワナウル 根覆いの 御神酒よ これを元にすればこそ 世は直る (ニウスイは根覆いすなわち根に土をかけて作った穀物の意とも言え、プーリンの執行される寅の日に合わせて子・丑の日に神酒を作ることから子・丑の意であるとも言う)

2 エー ナカザラス ウミシャグユ (ンゲレバドゥとも) ユワナウル エー 中皿の 御神酒よ これが満ちればこそ (これを飲めばこそ) 世は直る

3 エー ウヤギヨナウル ピャンガヨナウル エー 富裕の世は直る 小躍りして世が直る

(二) ウムイスイ スイティ 思いを籠めて注ぎ注ぎして下さり

ウマサ カバサ ウガムヨーンナ 美味しく 香りよく 戴いてありがとうよ

(三) イラヨー カバサ イラヨー 香りよろしく (イラヨーは未詳であるが、掛け声かもしれない)

ミョーワイスヨンナー どんどん差し上げましょうよ

そして、客が次の様に謝辞を述べる。

○ ノーリユー ミーリユー ウミシャグ ウガミタユ 直り世 稔り世の 御神酒を 戴きましてありがとう

最後に、酒(泡盛)を盛った盃を左右に揺らしながら、全員で〈願いの歌〉を斉唱する。この歌は沖縄で祝いの席で必ず真先に歌われる御前風なので、省略する。歌い終わってから飲み干す。

とじめとして、接待役と客が挨拶をして祝いの座は終る。

同一型の反復 この祝いの座はA・Bに2分してみるのがいいようである。Aは神人共食ともいうべきものであり、Bは本格的な宴という位置づけができる。というのは、前者では司が挨拶をし、神饌のお下りが接待の具の中心となるのに対して、後者は接待役が挨拶をし、料理も特別あつらえて、歌も三種歌われるからである。そして、今一つ、酒の出し方においても、この二つの部分で神酒の次に泡盛が出されるという共通の過程が見られるからである。この様

に、一つの宴自体がすでに基本的に同一の型が反復する構成をとっている。そして、前の方がより神事に近く、後の方がより人間中心となる傾向を持っているのである。

豊作の喜び 泡盛はタチグシンの形で神饌ともなるが、しかし神酒より歴史の新しいことは、^{ミシ}ウーナマス^{ミシ}御饅付きで神酒が先に飲まれ、昔ながらの歌が御前風より先に歌われるところに示されている。

まず、^{シユヌザラ}〈角皿〉をみてみると、各節の構造は共通している。初めに提示したことを同趣旨の別語で言い換え、これを感謝（あるいは祈願）のことばで受けている。この繰り返して、祭日や神饌・神酒を讃美しながら神聖化し、敬虔な祈りや豊かな稔りへの感謝の念を強調している。そして最後に、囃子詞で、世果報・稔りが理想通りになると囃したてている。接待役・主人側も客人も共に豊作を喜ぶのが、この歌謡の主題である。角皿に盛られた神酒は豊作の証しなのである。

次いで、客が神酒を美味しく戴いたと感謝すると、主人側は「真の風よ」と唱える。このことばの意味は島でもよく分からなくなっているが、いろいろ訊ねまわってみると、大体「真の風よ」説と「真の梶よ」説に整理できる。前者の説は、立派な風が吹いて作物がよく出来るということであり、後者の説は、真の梶によって船の方向を誤らないように、事柄が美事に完遂する意だというものである。いずれも祝いの座に叶った解であるが、前者の説がより説得力を持っていると思われる。すなわち、島では耕作に適した天候を「五風十雨」（風が五ほど吹いて雨が十ほど降るという意。風土のことを沖縄では^{フンシ}風水というのと通じているであろう）といっているから、海人的発想をする後者よりも、農耕に根ざした発想をする前者の解が正鵠を射ていると考えるのである。いずれ、来年の豊作も間違いのない、どんびしゃり、祈願成就という程度の意かと思われる。

勧酒歌と謝酒歌 次に〈中皿〉をみてみよう。(一)は^{シシブラ}接待役が歌う勧酒歌である。1と2は同じ構造を持っている。すなわち、神酒を提示し、これを豊作（富貴）の根元とし、酒器に満たして飲めば豊作（富貴）になるとする。そして3で、豊作の度を飛躍的であると讃美している。今出されている神酒は今年の豊作の^{タマモノ}賜であるが、その神酒がより一層の豊作をもたらす、いわば富の拡大再生産を図る聖なる飲み物であるというのである。この(一)は、酒の徳を讃えながら客人に酒を勧めることを主題としている。

これに対する(二)は、客が接待役の篤いもてなしによって美味しく酒を飲んだと謝意を表わす、いわゆる謝酒歌である。すると、接待役は更に酒を勧めようとして、(三)の勧酒歌を歌うのである。実に丁重なもてなしである。こうしてから客は改めて謝酒のことばを述べて、中皿の儀は終るのである。

泡盛と御前風 以上の昔ながらの神酒と歌に対して、泡盛を飲む時に琉歌形式の御前風を歌うのは、明らかに首里を中心とした沖縄文化の影響である。王府時代の泡盛の醸造は首里城下の三箇村に限られ、それも王府の管理の下に本職30家・重職10家に独占されていた。また、かぎやで風も、王位継承をめぐる劣勢の尚元を推した新城親方が勝利し、その喜びのあまり歌ったという伝承を持っている。泡盛も御前風も権力構造の頂点にある首里の文化を代表する

ものである。もとより波照間島でも税務所がうるさくない時期には島内産の米や粟で各自泡盛を造り、酒補佐^{サッブサー}という係がこれを集めて祭りの料にしている。しかし、これも泡盛を比較的自由に作れるようになった王府崩壊後に始まった風であったはずである。

してみると、祭りで泡盛を飲み、御前風を歌うようになったのには、首里から派遣された役人の力が与っていたと推察される。今例に上げた神客^{カンシン}の接待に引き続いて、親客^{ウヤシン}という村役人達（島の公的機関の長達）が同様に接待をうけていた（生活改善の一環として現在は廃止されている）。彼ら村役人こそ、貴重な泡盛を神饌として提供し、王府において格式を与えられた御前風を祭りの場で歌わせたと思われる。容易に改変を認めない祭祀の場に泡盛と御前風の組合せを定式化させているのは、首里の王権の強さを示す。しかし、伝統を重んじる祭式の原則は貫かれている。すなわち、神客^{カンシン}の後を親客^{ウヤシン}が行くのと同じく、政治権力を背景にした男の世界の新風は、宴の最後に付加され、〈願いの歌^{ニゲ}〉という風に呪歌のあり方に変っているのである。

泡盛と塩 してみると、泡盛の肴としてのタチブセ^(ウ)という塩辛い魚の干物（ない時は塩を用いる）が出るのも、首里の嗜好であろうか。今確かな資料を持たないので、これ以上は言えないが、酒呑みを辛党というように、度の強い酒は概して塩辛さを求めるものである。テキーラには塩入りの小びんが付き、粋な日本酒の飲み方の一つとして、杓のふちに塩を盛りつけて飲むというのがある。上代においても塩が酒の肴として最底限必要であったことを、万葉集の貧窮問答歌（巻5・892）が明らかにしている。度の強い酒と塩の取合せは、大体普遍性を持つようである。

反復の効用 神客^{カンシン}と親客^{ウヤシン}の接待は大がかりなもので、緊張が漲っている。この後、村の長老組（60才から73才までの男子。以前は50才から73才までの老人であったが、平均寿命が延びて改正された）の接待がほぼ同じ過程で行われる。部落内における長老達の位置は高く、長幼の序は守られている。次いで、司^{ツカサ}とバナヌファーの宴と、イショ^{フサー}補佐（祭りに必要な魚類をとる係り。今は廃れかけているが、昔は数日間の祭りの料を整えるために、小屋掛けをして寝泊りをしながら鮮魚を祭場に送ったという）を慰労する宴を催す。小規模ながらやはり同様の過程を繰り返す。この頃にはかなり開放的な気分満ちてきている。こうして、この日だけで5回の宴が反復される。そして、この日の最後に農作物の豊作を祝って巻踊りが熱狂的に繰り開けられる。踊りの輪の中に泡盛^{サキ}と盃を持った道化が1人入り、人々に巧みに振舞って景気づけをする。耳がつんざく銅鑼^{ドラ}が始めは緩く、そして次第に激しいテンポに変る。これらに合せてジラバが歌われる。

豊作を感謝し、来年の豊作を祈願しようという祭りの主題は、何度も繰り返される宴によって高められる。そして、これが酒の陶醉によって拡大され、酒を飲めない女子供をも巻きこんで、狂躁のるつぼと化す。そこには、祈願と感謝の念に満ちた、一点の曇りもない歓喜の世界が展開される。星空にとどろく島人の声は、神々も照覧あるであろう。

翌日は朝祝^{アサヨ}い（または朝願^{アサニゲ}いとも）で、後宴に当る。長老組が改めて客として招かれ、司の神事終了後、略式ながら昨日とほぼ同じ形式で宴が催される。長老達の話題がゲートボールのことに集中するのも、後宴らしい。続いて、長老組は他家筋の家々を廻って接待をうける。い

ずれも同一の型を踏んでいるが、後に行くほど略式化が進む。また、^{シシブラ}接待役あるいは村の総務を務めた人々をも客人として慰労する小さな宴も催される。

^{ブーリン}豊年祭と^{アミデュワー}祈年祭はほぼ同様の過程を経るが、^{アミデュワー}祈年祭の場合だけ朝祝いの後に^{アサヨ}世願いが行われる。村の広場に氏子が集まり、^{サンシン}タチグシンと塩を供え、総務役の簡単な祈りのあと、一座にそのお下りが流れる。次いで総務が挨拶をし、長老組の最年長者が謝辞を述べる。ひとしきりして来年の豊作を祈願して^{サンシン}巻踊りが行われる。この後、三線、太鼓に合せてまず御前風が歌われ、次から次へと日頃自慢の^{シビラハナミチ}波照間島節・祖平花道などの民謡が自由に歌い舞われ、隠し芸が飛び出す。こうして歓を極め、祭りの全てが終了する。

聖から俗へ 以上、祭りは多数の宴の反復で構成されている。祭りは一つの大主題を持つが、この大主題を全うするために幾つかの小主題が設定される。そして、その小主題群の配列は、聖から俗へと移行している。そしてまた、その小主題を支える幾つかの宴の配列も厳粛から寛ぎへと推移する。そして更に、その単位となる宴が、やはり神妙から自由へという過程を迎える。そして、これをもっと厳密に言うなら、宴の単位自体が同一型の反復であり、神事から人間中心の接待という方向性を持っている。流れは全て一定方向に向いているわけである。これを酒を中心にみるならば神酒から泡盛へ、文学・芸能を中心にみるならば神歌・神事舞踊からジラバや^{サンシン}巻踊りそして三線にのる御前風を筆頭とする民謡や琉舞へ、主役を中心にみるならば神から神人そして村人へと展開しているのである。そのあり方は、基本的には久高島の場合と少しも変っていない。これは恐らく他の島々の場合も同様であると思われる。

結び

二つの村落共同体における祭りを通して、まず酒神の性格を述べ、次いで宴のあり方と文学の関係を述べてみた。

久高島の場合、女性が島で農業を営み、男性は旅に出ている。そして、女性はおなり神として男性を守護し、島の繁栄を祈願している。このように女性は穀物を生産し、神女として神に仕えるため、神酒の神は女神となっている。

祭りは宴によって構成されている。そしてその様式は、原初の時空間から現代へ、聖から俗へ、公から私へ、神女から一般の村人達へ（あるいは男性達へ）、神酒から泡盛へ、神歌から^{サンシン}三線音楽へという一定の流れを持っている。だから、この祭りにおける宴は、昔からの文化とともに現代の文化をも合せ持つ豊かな文化地帯ということができる。

この宴における流れは、確かに調和に満ちている。これをよくみると、概ね神事の方に重点がある。これは神に対する篤い信仰心の表れであって、島という共同体の社会的な発展段階に見合ったものである。

本来宴の世界に見られる流れの濫觴と河口とは対立しがちで、価値がよく転換するものである。秩序正しく始まった宴も、最後は無礼講になりやすいのである。だから、宴の前半と後半

は反逆・離反の精神を孕むことになる。しかし、久高島の宴に明瞭に窺われた文化の重層性にしても伝統的な神事芸能に対する造反・離反の精神を持つものではない。祭りにおける宴の空間的な構成はあくまでも秩序正しいが、その前半と後半は文化史的には水と油の関係にあり、間をとりもつ中流がないのである。

このことは、村落共同体の文学や芸能の誕生が、神事場に求められるものと、そうでない別の場に求められるものがあることを示唆する。それでは、その祭り以外の場とはどこであろうか。このことは既に村落共同体を飛び越えた社会をも対象とすべき問題であろう。これは酒のあり方とも深く関係するはずであり、今後の課題とならなければならない。（成稿昭和56年9月）